

明治 150 年記念 資料小展示「文書館資料にみる幕末・明治の人・物・文化」 第 3 回
2018.3.31-4.26 (山口県文書館)

奇兵隊士 の

いでたち



当館の「元森家文書」は元森熊次郎の遺品からなり、軍服・軍服着衣の写真・奇兵隊の袖印をはじめ、隊中使用の箸、御守などの所持品が納箱に入れられて遺族に伝わったものです。諸隊士のまとまった遺品として貴重で、軍服を納めた箱の蓋裏書や書簡からは彼の活動の活動の実状がうかがえます。

元森熊次郎（もともと くまじろう）（1845－1868）は萩藩士雇、長州藩士。奇兵隊小隊司令。文久3（1863）年5月久坂玄瑞らに従って下関での外国艦砲撃に加わり、ついで奇兵隊に入隊しました。元治元（1864）年8月には米仏蘭英四国連合艦隊の来航に出戦し、この冬、恭順派が勢力を得ると、慶応元（1865）年正月美祢郡に出戦、その夏土籍に列せられました。慶応2（1866）年6月の四境戦争（第二次幕長戦争）には豊前小倉城攻略に戦功をたて、慶応4（1868）年4月には討幕軍の奇兵隊書記となって入京、ついで隊長を兼ねて北越に出陣し、閏4月越後魚沼郡小出島に進み、堀内で流弾に当たって負傷、ついで5月7日病院で治療中に死亡しました。享年24。（『明治維新人物辞典』吉川公文館）

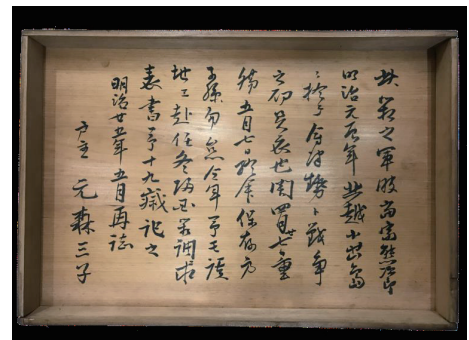
【展示資料1】元森熊次郎軍服および納箱（元森家文書44）

軍服は慶応4年（1868）閏4月27日、熊次郎が戊辰戦争で北越に進軍中、新潟小出島戦で被弾し重傷を負った際の着用品。上衣はフロック型マンテル、布地はゴロフクレン（ゴロフクリン、呉紹服連、呉羅服綿、grofgrein）と呼ばれた輸入品とみられます。上衣の右肩に銃痕が1カ所あるほか、左腋から脇腹にかけて、おびただしい血痕が残っており、激戦の跡をしのばせます。

上衣の右袖に、細い白帯が1本付いています。慶応4年6月、新政府は諸藩に命じて軍服の徽章の雛形を提出させていますが、その雛形には、長州藩（山口藩）の袖印は、図と共に、「右袖一ツ引幅一寸五分、袖口ヨリ二寸上リ」と記されており、これにより、元森の軍服右袖の白帯は、長州藩の制式であったことが判明します。

また、この軍服が納めてある箱の蓋裏には、熊次郎の死後、元森家を継いだ弟・三子さんし（甫仙）が軍服の由来と収納の経緯を記しています。

「此箱之軍服、当家熊次郎、明治元辰年北越小出島二於テ会津勢ト戦争之砌着衣也、閏四月廿七日重傷、五月七日捨命、保存方子孫勿怠、同年予モ該地工赴任冬帰国、箱調求表書、予十九歳記之
明治廿五年五月再誌
戸主元森三子」



【展示資料2】元森熊次郎写真（元森家文書43）

写真左が元森熊次郎。慶応4年（1868）3月、戊辰戦争で大阪在陣中に撮影したものと思われます。撮影者は大阪心斎橋の写真師中川信輔。熊次郎の風貌を伝えると同時に、軍服の着衣写真として貴重なものです。



【展示資料3】袖印「長藩奇兵隊元森熊次郎春幹」（元森家文書9）

熊次郎が旧名「敬忠」から「春幹」へ改名したのは元治元年（1864）11月4日、藩主毛利敬親が、「慶親」から「敬親」に変名したことを憚ったためであろうと思われます。寸法、材質、表記方法など、すべて藩の規定通り。保存状態も良好で、奇兵隊袖印の基準品として貴重なものです。官軍の証である「錦切れ」が付いています。



※写真は立襟にしています。

▼袖印が付きます。

※画像上の処理です



▼右肩に銃痕があります。
戊辰戦争新潟堀口で被弾
した際のものです。



▼胸の3つボタン。



▼袖口の長さを調整
して縫っています。



▼裏地あり。内ポケッ
トも付いています。



▼写真と同じ白線入り。
この袖の白線は、戊
辰戦争での長州藩
（山口藩）の制式で
す。

▼下衣は、「ダンブクロ（段
袋）」と称された西洋式細袴
です。当時はまだベルトより腰
ひもの方が扱いに慣れており、
刀を差すのにも適していました。





★この解説及び写真は、山田稔「奇兵隊の軍服と袖印－奇兵隊士元森熊次郎資料－」（『山口県立山口博物館研究報告 第44号』）に負っています。記して感謝します。